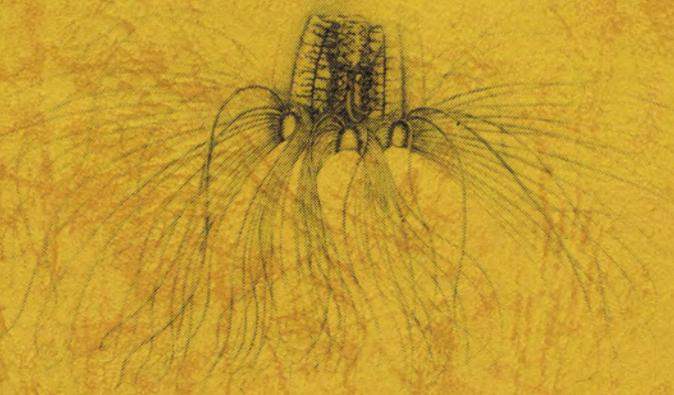


臨海・臨湖

No. 3



国立大学附属臨海・臨湖実験所

技官研修会議

昭和60年10月

目次

- 新潟大学 佐渡臨海実験所 石見喜一
..... 佐渡島の岩礁海岸における砂中動物の採集
- 岡山大学 牛窓臨海実験所 磯崎雅夫
..... 技官研修会議一昔と今後の方向
- 高知大学 海洋生物教育研究センター 井本成彬
..... 魚を採る
- 島根大学 隠岐臨海実験所 斎藤 博
..... 開催校になってみて
- 熊本大学 合津臨海実験所 嶋崎美津穂
..... 私の回想
- お茶の水女子大学 館山臨海実験所 青山公夫
..... 私の回想
- 神戸大学 岩屋臨海実験所 広田清次
..... 随想
- 九州大学 天草臨海実験所 後藤 勲
..... 海底からの珍品
- 名古屋大学 菅島臨海実験所 村田 明
..... 菅島臨海実験所スタッフ紹介
- 金沢大学 能登臨海実験所 新谷 力
..... 技官の仕事

佐渡島の岩礁海岸における 砂中動物の採集

石 見 喜 一

佐渡臨海実験所

潮の干満の少ない佐渡島でも、沿岸の漁村では、古くから釣餌用のイワムシを砂中または、軟質の岩石を砕いて取っていた。これにヒントを得て、臨海実習中に荒天や降雨で磯採集を行うことができず、学生の観察動物の種類が少ない時に、イワムシ取りの方法で砂の中に潜んでいる動物を採集してみた。

場所

水深50CM-1Mのところ、ちょうど手で動かすことのできる程度の転石の下に、小石まじりの砂底のある所を選ぶ。

採集用具

箱メガネまたは水中メガネ、軍手、掌大のアワビの殻、胴付長靴を用意する。

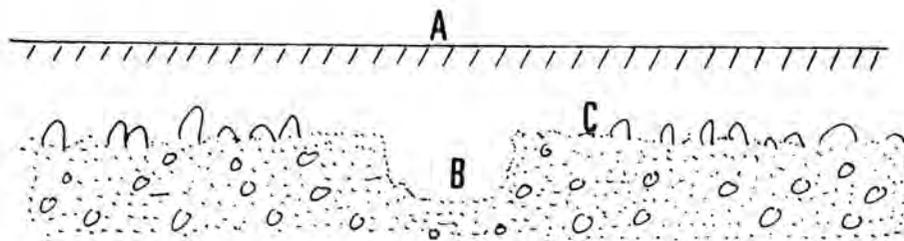
まず採集地点のまわりの2-3M分の転石を全部手で除き、箱メガネで水中を見ながら、ゆっくりと砂を掘って行く。おおよそ直径、1.0M-1.5M、深さ30CMくらいに掘り下げ、砂中に生息している底生動物を見落さないように注意しながら砂を少しずつあおるようにして取りのそく（この手技がコツである）。

このようにして動物を採集しながら掘り進む。あまり強く、砂をあおると水流と一緒に潜っている動物を飛ばしてしまうので、注意を要する。採集する時間は、干潮の時間帯がまわりの海水が拡散して濁らないので採集しやすい。

この方法により佐渡臨海実験所付近では、下記の動物が採集できた。

ミズシキゴカイ、イワムシ、ミサキヒモムシ、ミドリヒモムシ、サメハダヒモ

ムシ、ヒメアサリ、オニアサリ、イソテッポウエビ、オオワンフク（まれに取れる）オカメフク（まれに取れる）。



A 水面 B 採集点 C 砂礫底

技官研修会議一昔と今後の方向

磯崎 雅夫

牛窓臨海実験所

はじめに

技官研修会議も今年で12回目という一昔以上の足跡を残したことになる。第1回を玉野で開催するに当って、技官の皆様方より頂いた“どの様な会にすべきか”のアンケート解答の中、第1位は“他所の事情を知り、職務上の参考にしたい。”ついで第2位を占めたのが、“待遇改善の旗印の場としたい。”という解答であった。第1回世話人としてアンケートを出題した私と当時の岡大理学部M庶務係長とが、理学部事務室で激論した昔が懐しく思い出されます。M係長いわく→この待遇改善・・・この項目だけはアンケートから外した方がよい。・・・クドクド。磯崎→何もその様な会にしようという訳ではなし、折角全国から技官が集まるのを機会に、皆の胸中を聞くのが何処が悪い・・・フツフツ。見かねた当時のM会計係長とS庶務主任の2人は私の意見に賛成してくれその場は収まった。M係長の発言は何を意味するのであろうか？明らかに

全国の技官の集まりはいいが、職組的な会議となるのではという懸念がらであろう事は察しがつくし、その様な会なら、わざわざ全国から無理して集まる必要もないという胸中も理解できる。そして一昔か過ぎた。M係長の危くはおろか研修会議は職務上の研究発表まで行う会にと成長した。ほんとうに喜ばしいことである。然し待遇改善も依然として皆の胸中にあることは当然と思う。Love is over・・・悲しいねと“終りにしよう、別れ”がから。Love is over 訳などない・・・。大流行した歌の詞であるが、技官諸氏も待遇面に関しては、愚痴 is over・・・悲しいねと終りにしよう、別れ”がから・・・という気持が現在の心境ではないだろうか。そこで今回は待遇問題もふまえて技官研修会議の今後の方向を探ってみたい。

技官の職務上の位置づけ

昨年、東北大の小西教授が岡大に集中講義に来られた時に、少しばかりお話をする機会があった。小西教授は人事院の方にも関与されておられる由で、小西教授が云われたのは、先日、人事院に赴いた時に、臨海・臨湖技官の職務内容を聞かれたが正しくは答えられなかったとのことで、私にその事を質問されたのである。内心私はその様な機会こそ我々技官の最もPRしたい場だと思っただが、成程一口で技官の職務内容を表現するのはむづかしい事だと痛感した。そして小西教授に、次にその様な機会がありましたら、是非共よろしく願いますという事で説明させていただいた。小西教授も今日の話で臨海・臨湖技官の職務内容が、よく理解出来ました。必ず次の機会には、その旨を説明致しましょうという御確約を頂いたのであった。

さて、その話の内容であるが、次の様な説明をさせて頂いた。各実験所とも規模が大きくなるにつれ、年々仕事の多様化は進み、草ひきから、素人大工、左官、操船から船管理、海水揚水施設保守やら採集・飼育。又実験補助から事務もとれば運転手もやるし、環境整備もやれば掃除夫もやるといった具合であ

る。勿論各所まちまちであろうけれども、一口に云って万能の便利屋的存在であろう。万能の専門家というのは一般論から云って世間には通用しない。大工は大工、左官は左官、技術屋は、その道に於ける専門家である。それ故に高給で処遇もされる。潜水士を一例にとってみよう。ボンベ1本ずつ午前と午後の潜水で3-4万という報酬はさておいても、ちゃんと上手元という雑役係が、ボンベの充填、運搬から、はては潜水中の監視まで務めてくれて、潜水士は只々潜水中の仕事だけこなせばよいことになっている。浮上中の一定の休養は労規法で勤務時間と認められ、当然潜水現場までの操船は潜水士とは別人である。然るに、ある実験所に於いてはボンベの充填、操船、潜水に至るまで一人でやっける時もあるから御立派である。免状がものをいう時代だけに、ちゃっかりと、高圧ガス、船舶操縦士、潜水士という免状を十把一絡でもっているから凄じい。あゝ、それなのに万一技官の職務内容を草ひきのみ、掃除のみといった単純作業と同一にランクされるような事があっては、将来に大きな禍根を残すばかりか、技官の士気の低下が一番恐ろしい事と思う。人事院で専門技術職俸給表の適用問題が企図されている時期だけに、なおさら臨海臨湖技官の職務上の位置づけが気懸りではある。

昇格条件の矛盾点

臨海（臨湖）は忙しい時は忙しいけれど、冬は暇でしょう。酒の肴は何時でもあるし、いいですね！と愚問を発する方達には返事をする気にもならないが、他にも腹の立つ馬鹿げた法が実在しているから不思議である。技官の昇格条件に、部下何名以上という条件がある。例えば大学では車庫長などが、運転手〇名かの長であるが、臨海・臨湖の諸氏は所によっては只1人だけの所もあり、孤軍奮闘、人知れず苦勞しているというのに。当事者が、この項目は“臨海・臨湖は該当せず”と無視してくれればよいが、反対に“部下もいないから昇格

条件は満たされない”とでも法解釈されては何時までたっても臨海・臨湖の技官は浮かばれない。又、行一5等級から4等級への昇格条件も、博士課程を有する学部とか、図書館職員では、年齢だけについて述べれば45才以上であるのに、博士課程を有しない臨海・臨湖を含む教室付職員では50才以上が昇格条件年齢なのである。その年齢差の5年はどういう意味を持つのか？臨海・臨湖その他教室付職員は暇なから長生をするとでもいうのであろうか。我々はむしろ年齢差は逆でもいいと真実自負している。臨海・臨湖技官に未だに定年を迎える年齢になっても、行一4等級が誕生しないというネックの1因かとも思われてならない。臨海・臨湖技官から見ると全く人を喰った昇格基準ではある。

私は小西教授に人事院で臨海・臨湖技官の仕事を理解して頂く為の説明として1例をあげさせて頂いた。それは先生と同じ東北大学の浅虫臨海から間山さんが南極観測隊隊員として出向し、その後1978年の20次には同じく浅虫の田村さんが隊員として参加しています。一口に云えば技官は草ひきをするのが仕事ではなく、草ひきもせざるを得ないし、南極観測隊員の様な仕事もしています。更に次の事をつけ加えさせて頂きました。(間山さんには了解済みです。)間山さんの話では給料は同年輩の隊員中最低で、「あなたは勤務年数の途中に何か不祥事がありましたか。？」と疑われる程であった由。この1例で臨海・臨湖技官の内情を御理解頂けるのでは、と申しあげましたところ、お解り頂けた御様子でした。

技官の給料は妥当だろうか

大学などでたまに教職員の方達と話をする事があるが、定年で後何年しか居らせてもらえないという話をよく耳にする。本人は勤めたい意志だが定年制があるので止むなくと解される。然るに技官会議では殆んどの人達が、早く身を引きたいが定年までは我慢するかが答えである。子供の為にとか、老後の為に

とかの家庭環境は同じ筈なのに、何故、何時までも勤めたい人と、早く引退したい人とははっきりと分かれるのであろうか。私なりに客観凝視してみた。一口で云えば前者は仕事量の軽減と年功序列の給料アップのせいであろう。後者は給料アップは同じでも、仕事は軽減どころか後継者育成不足による責任の大きさに、年と共に衰える体力。又、技官中で最優遇されている行一五等級技官でさえ、助手給料の頭打ちにも至らぬ額の技官給料の頭打ち。高齢になるにつれ早く引退し、体力のある内に別の軽い仕事でもという心情がよく解る。行二の技官にとっては、この思いはなおさらであろう。

定員削減問題

話は少しずれるが、公務員の定員削減、行二不補充という現在の厳しい動向がある。もし、このことが臨海・臨湖にまで波及するならば、長年に亘り築かれた臨海・臨湖の輝かしい研究業績が、研究材料確保の面から、もろくも中断されるであろう事は明らかである。

待遇面を考える以前の大問題として、当事者共々留意すべき点であると痛感、臨海・臨湖という特殊な職場だけに、あえて付記したい。

出張旅費問題

技官会議を継続する為には、どうしても避けて通れない事として出張旅費の問題がある。

如何に技官が研修の場で、大いに学ぼうという心意気が生れても、いざ研修会議出席という場合、行二職の出張は例がないとか、その他色々な理由で出鼻をくじかれる。別面、予算面で確立されている教官出張旅費の場合は予算不足は現状で致し方ないとしても技官とは訳が違う。或教官は学会は楽会に通ず、学会で発表しなくとも興味ある話題だけを拝聴し、夜の町で楽しんで来てても、当然の事として、出張旅費は出る。まさに学会（楽会）であると云った噂も聞

かせて頂いた。勿論それはそれで大変結構な事とは思ふ。技官会議も出張旅費の確立が最も重要な一項目ではなかろうか。一昔以上の開催実績（既成事実）を積んできたのだから。何時までも前例がないでは済まされない時期に至ったと思う。前例ばかりにこだわらず、いゝ事必要な事はとどしと改めるべきだと感じます。技官会議とは云うけれど、看護婦さんも技官です。看護婦全員に出張旅費となると云々の反論も一理あり、勿論、簡単な問題ではないでしょう。各所長の先生方、事務長他事務関係の方達の御理解を頂きつゝ、技官各位の真しな熱意と相まって、少しずつでも予算化の実現に近づきたい重要な事項と思われまます。

技官研修会議の今後の方向

今までの研修会議でも度々あった利点に、例えば海水揚水施設等で長年苦勞していた事が、他所よりの一寸したアドバイスで解決したといった様なことも、研修会議の大きな成果といえるでしょう。

やはり臨海・臨湖実験所技官研修会議の主目的は、臨海・臨湖という特殊性から生ずる技術的要因の研修（勉強）以外には考えられないのではなかろうか。そして特殊性とは1. 採集（含潜水）、2. 飼育、3. 船舶、4. 海水揚水施設・工作、5. 管理・用務、の点に的が絞られると思います。勿論、只の愚痴と異なる筋の通った待遇問題が話題になる事があってもよいと思いますし、発表議題にしても、研究者・学生に喜ばれた食事献立発表等があっても、大いに結構。中には学会で発表してもよい程の研究発表があっても大いに歓迎。兎に角、特殊性の中からの体験、成果発表、失敗体験も貴重と思われまますし、その他情報交換、話題提起といった事こそが、技官研修会議存続の方向として、ゆるぎない唯一の道であると確信する次第です。堅い面ばかりを並べましたが、第1回会議開催時の、アンケートに、“大いに飲み、大いに語り、親睦を深め

るだけで充分”（出張費は出ないかな？）という御意見も、かなりあったのも事実です。ともすれば孤独で憤まんやる方なき技官の一面を垣間見る思いです。又、会議受人側の事情を考える時に、現日程の延長は無理と思います。折角、全国から集っているのだから、あれも話したい、これも聞いて見たいという心情はよく解ります。然し乍ら、前述の旅費問題、限られた時間制約の中での研修会議では、必然的に臨海・臨湖の特殊性以外の話題は避けるべきでしょう。会議内容も凝縮型となるのは当然です。又、会場も、そろそろホテル、大学の会議室、国民宿舎等々、を考えて見る時期になった様に思います。実験所開催を理想としますが、毎年開催、各所持ち廻りの原則を通すなら、受人（世話役）実験所が持ち廻りという事にして、会場は別であってもよいという事です。例えば佐渡が受人当番だと、新潟の会場でやってもいいし、或は実験所に宿泊施設がなければ、佐渡の民宿で宿泊し、会議は実験所を使わせて頂くといったような事も一方法でしょう。皆様方の英知の結集で研修会議存続の道は、いくらかでも拓けると思います。

臨海・臨湖技官研修会議の益々の発展を願って、一昔の歴史を振り返り、今までの研修会議では禁句にも等しかった待遇問題にも敢えてメスを入れ、私なりに今後の方向を探ってみた次第です。

魚を採る

井本成彬

高知大学海洋生物教育研究センター

今年九州へ出張した時の事です、昭和四十六年に卒業した、M氏に逢って久しぶりに酒をくみ交しながら、その頃の実験所と海について話し合ったもので

す。酔が廻りいつもの井本の調子で話していると、私の小・中学生だった頃の話しになりました。M氏もその頃の海は・・・魚の種類は・・・海藻類は・・・と、その話に興味をもって聞いてくれました。それにM氏も学生時代に、この處で卒業論文の採集や、実験を行って来ので、あの場所で、云々じかじかと楽しかった、思い出の数々に、夜の更けるのを忘れたものです。そこで今回は思い出の海を回顧することにしました。

私の生れた家は、海岸を埋立てたところにあります。垣根越に海を眺めることが出来ました。満潮の時は石垣の中頃まで海水が来ます。子供の頃は、よく石垣に腰を掛けて、魚の泳ぐのを見ていたものです。クロダイやスズキ、タカノハダイ、ボラ、アイゴなど種類も多かったものです。又満潮近くなると、石垣の側を泳ぐ、何種類かの魚の習性も知ることができました。

この中で、ボラは群れをつくって、海岸に沿って泳ぐ習性があります。その群れを、一網打尽にする漁法があります。それは、ボラのよく通るところを調べておいて、その場所に網を敷く方法です。高台には、見張人がいて、ボラの群れを見つけると合図をする。何人かが二隻の舟で打合せ通り、その場所に網を敷き、群れの最後尾のボラが、敷網にはいった時に最後尾側の網を引き上げる。すると、反射的に先頭のボラは、後方に異常が起きた事を知る、そこで先頭のボラは、進んで来た方向に転換するが、この時、後方の網の引上げが始まっているため、先頭のボラが戻った時は、すでに網は上っている。ボラは慌てて、もとに戻るが、すでに逃げ口がなくなっているといった方法です。これは、風呂敷を網と考えて頂くとよろしいかと思います。ボラは、五-六匹の群でも後方になにかを投げると、そのところに戻る、この習性を考へたものだと思います。

ゴンズイの追込み、これは一人でも出来るので、私の楽しみの一つでした。ゴンズイの群は、70-80匹のものが多かった様に思います。私の家では、ゴンズ

イ用に、直径1米ぐらいの枠に、長さ1.5米の袋網をつけ、その枠に3米ぐらいの柄をつけた、タマ網を準備してありました。ゴンズイの群れを見つけると舟で、群れの前方に、ゆっくりと網を下し、一方で竹竿を使って、ゴンズイの群れの後方から、網の中へ追い込みます。勢よく追い込もうとすると逃げられますが、何回かやっているうちに、上手に、のがさずにとることが出来たものです。ゴンズイの肉はやわらかくて、不味な魚とあって、食用にする人は少ない様ですが、卵を持っている七-八月頃はしょうがを入れて、姿のまま煮つけると、食べられます。

これは私にとって忘れることのない、出来事がありました。

それは終戦直後の事です。おだやかな日の午前中でした。「ズシーン」という音で、外に飛び出して、海を見ると、2-3隻の船が、あたりを見て、何かを探している様子でした。まもなく魚が腹をかえして、浮きはじめたのです。それはダイナマイトを投込んだものと解りました。次から、次へと浮かんでくる魚の数が、遠くから見ると、白い花びらを、ばらまいた様でした。たちまち、何十隻もの船が出て、魚を拾いはじめました。私はこの様子を眺めていました。魚も浮かなくなっつて、船も帰った数時間後でした。遠くの方で、大きな口をあけて、浮き沈みする魚を見つけましたが、船が近くにならないので、兄が泳いでつかまえることになりました。手には、小さな青竹を持って行ったのですが、近づいて見ると、魚の大きさに驚いて後退りしたそうです。岸に引揚げると、なんと体長が1米20-30センチもあるアカメの魚だったのです。この湾で、こんな大きいアカメがとれたのは、はじめてだそうです。

私の趣味に、船釣があります、釣糸をたれて、獲物をまつ時、釣竿の先を見ていると、過ぎし日の思い出が浮かんで来ます。

開催校になってみて

斎藤 博

隠岐臨海実験所

昨年十月実験所で全国技官の研修会議を開いたところ各地から多数出席され盛會に終らせて下さったことをまず御礼申します。

御承知の通り第一回岡山玉野から今度十一回になった、あの頃運営その内容面に於いてもやや将来が不安なものだったのにみんなの協力とその気迫ですばらしい組織に充実した、万歳を言いたい。

私は当所に決定された時から隠岐でなくては修得し難い何物かを皆さんが心に持ち帰ればまず大成功と考へていた。恵まれたことに所長はじめ大学職員関係者が真に理解していただき、私が立案計画した要項を主体とした運営に積極的な協力をされ、この結果を生み出してくれた事を有難く幸せだなあと感謝しています。

発表議題も年を増すごとに多くなり一日では処理し難くなってきました。当日幹事の井本さん磯崎先輩達と会議時間の繰り上げも検討し開会時間も変更した様に思います、期日を定めた議題提出についても各自が責任をもって守らなければ当日の運営がうまくやれません。又今迄をふり返ると特定な人だけの発表に片寄りつつある傾向をみます。より巾広い知識を得るため全員が発表出来る様な仕組み考へてよさそうです。あの時井本さんから提案のあった議題提出方法と内容検討が決議され十二回会議より実行されるのがたのしみです。云う迄もなくその組織の中に居る者だけいくら満足しても周囲の方々がその会を認なければ立派なものとは云えません。

当番校のため多少の気苦労はしました、これは当然です、我々の仕事は特殊

なものですからこの様なことを聞くについては今迄の経過と自分の考えを関係者と話し理解して頂くことが大切です会議終了後にぎやかにする懇親会もたのしみでした。この席で生まれる親睦は何とも云えません。ただみんなが気軽に参加出来る配慮も大切なことだナアと思いました。私達は数日後決算書を作りました。この時問題になったのは欠席校の会費納入のことです。この会の席上で私は云った様に思いますが開催校からは案内状から会議終了後の報告に至る迄文書で連絡し、欠席校は開催期日前に会議費を納入となっているのです。正直なところ今回四校しか入っていません。仮に今入金されてもその処理は出来ません。お金のことですから苦言がましく云うのも何とはなく気づらく思いますけど今後の運営上必ず問題が生じるものと思って、定められたことは実験所の私達が中心になって処理するのが本当だと考え、各所技官の自覚を願うものです。

日頃我々は各所の実状を見定めその任にあたっていることは云う迄もないけれど環境の異なる地域でどんなことをされ又どんなお考えをしているのか何んでもいいから話し伝えるのがあの機関誌です。

臨海・臨湖第三号発刊にあたり一月始め投稿依頼が編集者牛堂さんから来ました。会のたび投稿依頼の件が出ます。当時発刊について私も発案者の一人でした気軽に出来ることの様に考え投稿が多くその編集に骨折るものと思っていたのに提出も少なく発刊に苦勞されていることが同がわれました。編集者の責任でないことは云迄もないこと各自協力し合って何時迄も発刊されることを願うものです。

遠い遠い隠岐島迄御苦勞様でした。周辺の動物調査に併せ夕食用のオカズ採り実現出来なくて心残りになっています。でも約束のウミウシは試食させたので満足です味はどうでしたか？

今後隠岐で開く頃には私など居ませんが後輩への引つぎにこのたのしかった

思いを話し、次回は一層みなさんの期待に報いる様指導したく思ったりして。

私の回想

嶋崎美津穂

合津臨海実験所

毎年のように夏の臨海実習が終ると技官研修会議が待ち遠しく思われる。年に一度仲間が集まり、先生方の研究の手伝いや雑用など仕事の内容を語り合い、その中で何か一つでも得たいと願う。

冬はどこの実験所でも静なものかも知れないけれど昨年の9月から週に2回主人は実験所の沖に出てプランクトンの採集を行っている。簡単なように見えても冬の風の日や雨の日は大変だったようだ。採集して来たものを動物プランクトンの大きなものとごみをより分けて、後は沈殿量を計る。同時に採水して来た海水の塩分を私が計っている。続くだろうかと心配しながら一年間はがんばってみようと始めてからもう9ヶ月が過ぎようとしている。今年の研修会議では、この技官誌と一緒になるかもしれないけれどその結果を発表したいと思っている。

所長さんからこの話が出た時、技官研修会議でいろんな話を聞き興味もわいてきたのでやってみようと思ったそうだ。やはり私達には技官研修会が大きな力になっているようだ。

話は変わるけれど第一回の技官誌にも書いたように、20年前この実験所には入った頃には学生の世話をするのが精一ぱいだった。6ヶ月(生後)の長女をおんぶして食事を作る私に、同じ年齢の学生さんから、おばさん、おばさん、と呼ばれ少し悲しかった事をおぼえている。その長女も今は短大二年生、私が

おばさんと呼ばれていた年齢になろうとしている。実習の時など食事の準備等で若い人達の好みそうなものをと、アドバイスして手伝ってくれるようになった。来る年来る年を必死でやって来たようでもうこんな年月が過ぎたのだろうか。と夢のような気がする。元気のない私を見て生意気にも僕達がいるから心配しなくていいと胸をたたく高校三年の長男、毎年のように実習時の献立に気を使い、秋の頃には胃が痛くなる事もあるけど親の仕事を小さい頃から見て育った子供達が今は逆に励ましてくれるようになった事でこの仕事を続けて良かったとつくづく思う。これからも残された年月の方が少なくなったこの勤めを一日一日大切に努力して行きたいと思っている。

最後に研修会で悩みを分ち合った方々が退職して行かれるのが一番淋しく思います。

私の回想

青山 公夫

館山臨海実験所

緑濃い隠岐の島影を思い出しながら、長い様な短い様な今までの公務員生活を振り返って居ります。

技官会議にも、第一回から欠席する事なく出させて頂いて居りますが、一步一步漸進して来たこの会議を持てた事を実に幸であったと思います。各実験所が様々な立地条件・職場状況の異なる個体の集合でありながら、十余回を重ねた事は役員のお骨折りと各自の努力の賜ものと思います。会議を終了して実験所を立ち去る時など、手を振り見送ってくれる職員の姿を眺め、実に孤立した職場だなあ、と思わずに居られません。しかし今我々は横の連合が出来まし

と、これからもこの縁を絶やさぬ様皆様の御協力を切望します。

どんな事でも試行錯誤のない前進は有りません。悩み迷い大いに考えて下さるようお願い致します。会議への出張と旅費の問題一つ取っても容易ではありませんか、意欲のある人材を集めるためにも、業務の危険・責任・重要さを、認識した待遇の改善等要求すべき事があると思います。その為にも自己の技術の獲得と研究は心を入れてやらねばならない事と考えます。会議は技術と情報交換の場となって来ましたが、この傾向を益々発展させ技官相互の向上を計っていたきたいものと思います。

私も今年の岩屋会議を最後に定年退職となります。今までの集会は折にふれ懐かしい思い出となる事でしょう。この紙上をお借りして皆様方よりの長年の御交誼を感謝致しますと共に、技官研修会議の益々の御発展、各位の御健康と安全を心よりお祈りいたします。

以上

随 想

広 田 清 次

岩屋臨海実験所

技官研修会議も今年で第十二回目を迎え、今年には私が勤務する神戸大学岩屋臨海実験所で開催される。

第一回目は昭和四十九年十月、発起人の磯崎雅夫氏の呼びかけで岡山大学玉野臨海実験所で開催される事になり、私は各地の実験所を訪問した事が無かったので良い機会だと思った。多くの技官等も出席すると思って私も出席しました。初回は事務系職員懇談会として、十六実験所が参加して出席者は二十五名

であった。

第二回目より名称を技官研修会議と改められた。出席した人達は平均に年齢が若く見え私は年長の方であると思った。

初回の為か、各自が多少緊張気味に見えるが私も勿論同様であった。でも話合ってみると技官同志なので気楽に話もはずみ各実験所の内容もわかって来た。

岡大の玉野臨海実験所は思ったより海岸から離れているのが印象に残っている。

又、磯崎氏は弁舌さわやかに感じた。

会議も会を重ねる毎に、各技官に会えるのと各実験所を見学するのを期待するようになった。

現在まで各実験所を見学させていただき感じた事は、交通の不便を感じる所が多いが静かな良い環境地にあると思った。比較して神大岩屋臨海実験所は交通の便は良いと思うが少々騒々しい場所にあると思った。

私はあまり大勢の前で話す事がなかったが会議を通じて話す機会が出来、序々に自信が身について来たのが自分を一步成長させてくれたと感謝している今日此頃です。

尚、機関誌発行委員の方々の御苦勞に御礼申し上げます。

昭和60年6月20日

海底からの珍品

後 藤 勲

天草臨海実験所

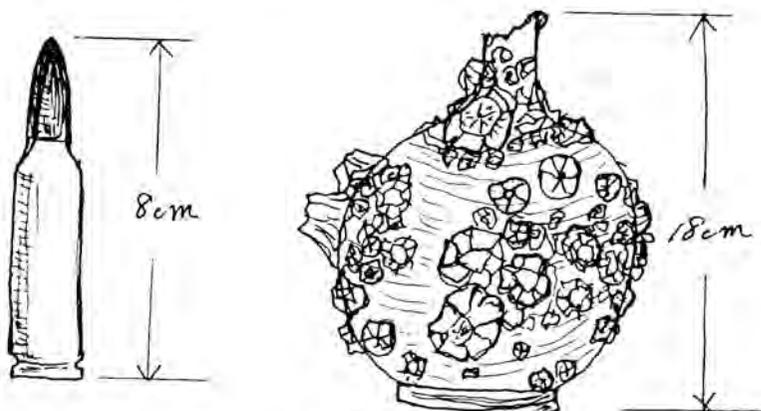
私達は年間に何拾回とドレッチ採集を行っておりますと、海の底から時々意

貴重な骨董品が砂の中に混って揚げてくることがあります。

その1・正確な日は覚えておりませんが10年位前のことと思います。いつものように富岡半島の北側で水深60M位いの所をドレッチをしておりました。じっくり砂が入ったドレッチを船上に揚げたら、その砂の中から全面にびっしりフロッホが付着した小型の壺がでてきました。その付着具合から見て大分古い年代物のようなので、その場ですぐ捨てるのには何だかもったいない思いがしたのでそのまま持ち帰りました。そして水道で壺の仲の砂を洗い出してみたら、花瓶として使えるようなので自宅へ持ち帰り玄関に花を生けておりました。初めての来客は必ずその小型の壺が目にとまりどうなされましたかと聞かれます。今では私の宝物になっております。

その2・今年の六月十日のこと、ある大学の依頼でナメクジウオを採集しておりました。その時も又砂の中から、小さな銃弾が二発でてきました。たぶん40年前の終戦時日本軍が処分したと思われます。そのうちの一発は指で強く押すとホロボロになりましたが、あとの一発は内部の火薬は腐ってドロドロでしたが外側はわりとしっかりしておりましたので、布でみがくと真チュウ色に少しかがやいてきました。40年間も海底に眠っていたにもかかわらずまた私達の目の前に、先の尖ったぶきみな姿を現しました。

今机の上に立っておりますが。私達の年代はまた40年前のことを忘れることができません。



菅島臨海実験所のスタッフ紹介

※所長・教授 佐藤 英美

(有糸分裂の機構)



- 趣味は写真・歴史・考古学だそうです。
- 毎日でも宴を開くのが好きですが、なかなかそうもいきません。
- 酒量は少々。

※助教授 黒田 英世 (生体膜の生物物理学)

S ■■■■■, ■■■■■

- 趣味、料理・洗濯・掃除だそうです。
(特に料理はプロなみ)
- 酒量は多少。
- スポーツ万能



※助手 加藤 豊樹

(細胞運動関連蛋白質の生化学)

S ■■■■■ ■■■■■型

- 趣味は、ヨットだそうです。
(最近は、ごふさたしているとのこと。)
- 合気道 二段
- 日本酒党



※技官 村田嘉治 S. ■■■■■ ■型

- ・臨海の採集名人
- ・趣味は魚釣り（魚の料理プロ級）
- ・操船主任・採集・船舶管理



※技官 村田明 ■■■■■ ■型

- ・趣味はサッカー・将棋を観戦すること・磯釣り・
- ・操船・飼育・建物管理
- ・酒量多少



※技官 砂川昌彦 ■■■■■ ■型

- ・趣味はパチンコ・マージャン・スキー等
（パチンコはプロ級）
- ・臨海の事務長
- ・酒量多少

※事務 野坂みさえ ■■■■■ ■型

- ・臨海の台所を預かる人
- ・料理名人、（美味ですよ）
- ・クラシックを聞くのが趣味だそうです。
- ・臨海の山本富士子ヨ



※院生（D3）

伊藤知彦 S. ■■■■■ ■型

（有糸分裂の調節機構）



※院生（D1）

小畑秀一 S. ■■■■■ ■型

（受精電位のイオン機構）

技官の仕事

新 谷 力
能登臨海実験所

私達技官の仕事が多様であることは今更申し述べるまでもありません。時には執筆や講演の依頼も有ることでしょう。私達は研究者でないので専門的なことは分かりませんが、ごく通俗的な内容のものについては平素から多少考えて置くのも良いのではないかと考えます。以下は北国新聞（昭和56年2月7日）

「石川の生きもの」に掲載された「ナマコ」ですが参考になるでしょうか。

仕事上ほとんど毎日、磯の生物とつき合うようになってから、20年が過ぎた。10年ほど昔というが、私の少年時代に比べて能登半島沿岸の変化は大きく、年ごとに汚染が目立つようになってきた。

そのせいか、激減した動物もかなりある。それでも金沢大学理学部付属能登臨海実験所のある九十九浜の透明度は他の入り江に比べて高く、魚の群れやナマコ、ウニ、ヒトデなどの無脊椎動物の観察も容易で、学生の実習に役立っている。

ナマコは砂泥にすむクロナマコ、岩礁に多いアカナマコなど色彩に富んでいるが、いずれも同種のマナマコである。腹面にある管足で海底をはい、触手を使って砂泥を口に入れ、その中にある栄養物を摂取している。

昼はかくれて夜になると活動するネズミに似ていることから「海鼠」という字が当てられ、その形から英名は「シー・キューカンバー（海のキュウリ）」と呼ばれる。その姿態はグロテスクで、最初に食べた昔の人はずいぶん勇気がいったことだったろう。

このようなナマコだが、食品としては全く捨てる部分がなく、腸管の塩辛を

コノワタ、卵巣を干したものをクチコといって、ともに能登を代表する珍味になっている。酢のものとして食べる体壁には微少な骨片がたくさん埋まっており、その形で専門家はナマコを分類している。

また、体壁にはわずかではあるが、動脈硬化を予防する成分が含まれているそうである。これを煮て乾燥させたイリコ（海參）は、古くから朝鮮ニンジンと並ぶ栄養食品として注目され、徳川時代には中国へ輸出されて利益を得たという。

ナマコは重要な水産食品であるが、近年、その漁獲高が全国有数の産地である七尾湾で減少していると聞く。増殖には、すみかとなる石を沈める方法が取られており、佐賀県や宮城県では収穫量が増加しているという。増殖といえば、ナマコの再生力は強力で、体を二つに切断しても、こうものある後ろの部分は再生する。また刺激を与えると内臓を吐き出すこともあり、半年もすれば新しい内臓ができあがる。この再生力を、増殖に利用できないか、と時折話題になることもあるが、再生といっても完全な個体になる例は少ない。

昨年、の潜水調査で、九十九湾内の水深20メートルの砂泥帯に体長30センチの立派なナマコが数多く生息していたが、逆に浅い所での若いナマコの数は非常に少なかった。このことは、湾内で近年はナマコをとる桁（けた）網漁が行われていたために立派なナマコがいる半面、若いナマコのすみかである磯が、コンクリート護岸、埋め立てなどで破壊されたことによるのであろう。

以前、七尾市の石崎漁港で、老漁師が護岸工事の進むのを見ながら「これではナマコが少なくなるわい」と、つぶやいていたのが印象的だった。環境の保全も、もっと生物の立場から見直す時期にきているのではなかろうか。

メモ

ナマコはウニ、ヒトデなどと同じ棘皮動物。能登半島沿岸のナマコ類につい

ては9種類が記録されている。日本各地で食用として6種類が数えられているが、石川県内で食用にされるのはマナマコだけである。ナマコ綱。

編集後記

最初に原稿をおよせ下さいました、みなさんに感謝致します。

原稿が集まるかという不安と、期日までに機関誌が、完成するかどうかという不安で、いろいろしたような逃げだしたいような気分でしたが、8月を迎え9月も近くなり臨海実習も一段落ついたところで、そろそろあせり、やっと完成の目処がたちました。

編集後記を書く段階になり、又逃げ出したくなるという繰り返しで、編集委員なんかやるんじゃないかなと思ったと思いましたが、折角技官のみなさんが忙しい合間を縫って送ってくれた原稿をほったらかしにするわけにもゆかず、酒を控えて自分なりに、一所懸命にやってみました。

まだまだ力不足の点が多々あると思いますが、若輩者ゆえ大目に見てほしいと思います。

ところで、この機関誌は本当に今年の岩屋の技官会議までに、印刷屋さんからとどくだろうか？

8月26日

編集委員 牛窓臨海実験所
牛堂和一郎